

今、明日の農業を考える

山武農林業フォーラム

11月28日、農業・消費関係者300人が参加し、地元農業者と山武農産物消費者の取り組みについての山武農林業フォーラムが行われました。山武郡市内の九つの農業団体・組織が実行委員会を組織し、県市町・農協が協力して開催したものです。

農業を取り巻く環境は、燃料となる油や生産資材の高騰、価格の低迷などから厳しい状況にあります。一方、地球的規模で考えると、温暖化の影響から異常気象が各地で発生、年・地域による生産が不安定となり、併せバイオ燃料などの影響から十分な食料を得ることができない地域が増えつつあります。世界で、飢餓人口が

増える中、日本では食料輸入が増え続けており、自給率の向上が急務になっています。

このような状況の中で本年度のフォーラムは、「未来の食料に責任を持った農業生産と消費」をテーマに、山武の農林業を消費者とともに考える場として、また、今の時代を乗り越え更なる地域農業の発展に役立つことを目的に開催されました。

午前中は消費者を対象に、農産物の生産現場と生産者の思いを知ってもらおうと行われました。ほ場視察が、成東地区のねぎ栽培、収穫が始まったばかりのきゅうりハウスなどがある南部と山武地区の有機栽培農家、芝山町にある丸朝園芸組合の大型選果場などの北部の二班に分かれて行われました。それぞれの視察場所、旬の新鮮な野菜を味わった消費者は、山武の野菜をたっぷり使った豚汁などの昼食を食べ、「山武が素晴らしい農業産地だということが理解できた」と感想を述べていました。

午後から行われた事例発表の中で、JA山武郡市園芸部の作田利通氏は、「現在1,800人の生産者が常に消費者の安心安全を考えつくっている。そして、若い人たち、地

域の人たちのニーズに合わせて物を作っている」と話しました。

また、房総食料センターの宝利武氏は、「土づくりを通じて、より安全でおいしい野菜を届け続け、今では117戸204人の組合員たちが、『3つのひびきあい』『生産者と消費者』『生産者同士と職員』『家庭の夫婦や親子』を大切に、27年間野菜の産直に取り組んでいます。生産者と消費者が、信頼関係を構築していくために、ますます宣伝交流が大切になっていきます」

祖父を師匠に取り組み3年、母と祖母と3人で農業を営んでいる、さんぶ野菜ネットワークの鈴木克法氏は、有機・減農薬野菜の生産・販売の取り組みについて話しました。

生活クラブ生協ちばの渡辺伽奈氏は、「今後も農村の活性化と食の未来を見据えて農の息づくまちづくりを進めていきたい」と話しました。

光学校給食センターの外山文恵氏は、地元の学校給食現場での地産地消の取り組み。児童生徒に安全な給食を提供していく体制づくりについて話しました。

意見交換会の座長を務めた、山武農林振興センターの熊切氏は、「いろいろな意見が出ましたが、食の安心、安全が騒がれる現在、食についても一度生産者はきちんと生産管理を



有機栽培農家の佐藤さんの作業場を見学

しなければならぬ。しかし、担い手の問題があり、農家の後継者だけでは担いきれない状況にある。新しい担い手の育成に取り組む必要がある。食育では、収穫体験などを通して、生産者と消費者の交流が今後も絶対必要。互いに現場を見る必要がある。そして、厳しい消費者の目があるからこそ、より良い農産物を生産できるようになる。お互いを理解し未来に責任の持てる産地となってもらいたい」とまとめました。

最後に実行委員会を代表して、武田秀一実行委員会副会長から「平成20年度山武農林業フォーラム宣言」の提案があり、参加者全員により拍手承認されフォーラムが終了となりました。